

上田圭委子著『ハイデガーにおける存在と神の問題』 について

山本 英輔（金沢大学）

1. 本書の主題と手法など

存在の真理への人間本質の関わりにもとづくような人間の本質の解釈は、無神論である、もしも世間のひとが主張するならば、それは、ただたんに性急であるだけでなく、すでにそのやり方において間違っている¹。

生前のハイデガーが、サルトルの「無神論的実存主義者」という規定もふくめ、無神論あるいは無関心主義だとする非難めいた意見を陰に陽に受け取っていたことは、この『ヒューマニズム書簡』の発言から容易に想像されることだと思います。しかし「間違っている」という決然とした否定にもかかわらず、彼は「有神論的であることもできない」とも言っています。そこまで慎重な態度をとるのはなぜなのでしょう。この『書簡』のおよそ10年前から書き始めた『哲学への寄与』のなかで、「最後の神」なる思索を書き綴っていたのに、それをここで示さなかったのはなぜなのでしょう。それほど、神について何かを語ることは「難しい」ことだった言うべきでしょうか。語ったところで、うまく理解されないと考えていたのでしょうか。

ハイデガーのテキスト全体のなかで、彼が直接「神」に言及している個所はきわめて少ないと言えます。そして、シュピーゲル・インタビューの「かろうじてただ神のようなものだけが我々を救うことができる」のような、何か思わせぶりのような発言が目立ちます。ハイデガー哲学における神の問題は、非常にデリケートなテーマであり、また難問です。上田さんは、この問題に果敢にチャレンジされました。神の問題がハイデガーの思索の「根幹に関わる問題」（本書、4頁）というこの認識に、ハイデガーのテキストをじっくりと読む者はだれでも賛同するものと思われれます。

では本書は、この「根幹に関わる問題」についてどのように扱っていかうするのでしょうか。通読してみるならば、本書は、つぎの二つの方法ないしはスタイルが採られているように思われます。一つは、神の問題に関連したテキストを年代順に追っていく成立史的・発展史的な方法です。これはとくに「第1部」の考察で採られています。もう一つは、「存在の真理」の基本構造を明らかにしつつ「存在」と「神」の関係を論じるという、思想構造の解明

¹ マルティン・ハイデッガー『「ヒューマニズム」について』渡邊二郎訳、ちくま学芸文庫、108頁。

ないしは解釈という方法です。それが第2部以降で採られるものであり、そこでは、単純に年代順に解釈するのではなく、テキストを横断し、また巡回しながら解釈が試みられるのです。ハイデガーの様々なテキストが解釈の俎上にのせられますが、それらのうち中心的なテキストが、『ヒューマニズム書簡』と『哲学への寄与』であるように思われます。

上田さんによるテキストの読みは厳密で、一字一句ゆるがせにしない態度に貫かれ、この点も大いに好感を持っております。そして何と言っても、500ページをこえる圧倒的なボリュームに驚嘆せざるをえません。ソフトカバーなのでその厚みが若干和らげられているものの、通読するだけでもエネルギーを要します。この大作を書き上げた上田さんの研究力を賞賛したいと思います。

第1部のほうは、極めて慎重に禁欲的に筆を進められますが、第2部以降は、慎重に解釈しつつも、しかし、事柄に則して内容を考察し、大胆に語るところがありまして、このあたりの「ギアチェンジ」というか「転調」といったところが、本書の魅力であると思います。そこで、私からの質問とコメントは、私自身の関心に基づいて、第2部以降の議論に関して行いたいと思います。

2. 第2部の議論から

・存在の真理——秘匿の強調

大変有名な個所ですが、『ヒューマニズム書簡』のなかでは、神という語で何が名指されるべきかを考えるための最初の出発点は、「存在の真理」だとされています。ここから上田さんは、「存在の真理とはどういった事態であるのかを明らかにすることは、ハイデガーにおける神の問題を考えるための、このうえなく重要な準備であるといえる」(378頁)と考え、「存在の真理」の構造について詳細に究明されています。

上田さんが再三指摘するように、ハイデガーにおいて、真理を非秘匿性、アレーティアとする捉え方が初期から後期まで「一貫」しているのは、そのとおりです。ただ、一連の論考で若干気になるのは、ハイデガーの思索の道においては、その非秘匿性（アレーティア）の捉え方（強調の仕方というべきか）に変化があるのではないか、ということです。ハイデガーは、『哲学への寄与』で、アレーティアに対して存在史的な批判的考察を行っております。例えば、「秘匿自身を取り除くべきものとして、また取り除かれ（ α -）ねばならないものとしてのみ経験され」(GA65, 350)、「問いかけが、秘匿とその根拠には向かわない」(ibid.)とか、アレーティアがプラトン以来「光」という主導的な表象のもとで捉えられた結果、秘匿性が経験されないまま推移してきた(GA65, 339f.)、などと言われています。

『存在と時間』の真理論を振り返ってみれば、真理は「存在者からつねに戦いとられなければならない」(SZ, 222)ものであり、「存在者が秘匿性から引き離される」(ibid.)ことが求められ、そのような一つの「収奪」(ibid.)という性格のものとされていました。これに対して、『哲学への寄与』では、秘匿は「存在の本質性格」(GA65, 330)として、どこまでも取り除きがたく潜みつづけることが強調されていると思われます。次の文を見てみましょう。

現の明るみ(Lichtung)なかで存在が自らを秘匿すること。自らを秘匿することにおいて、存在は本質的に活動する(wesen)。エアアイグニス、なにか存在者、現前者のように、白日の下に開かれて横たわっているのではない。(GA65, 342 傍点引用者)

この秘匿の強調が『哲学への寄与』の基本的トーンであり、それは「最後の神」についての思索にも大きくかかわっているように思えるのです。

ところで、第2部の「存在の真理」についての考察のなかでは、「明るみ(Lichtung)」についての考察にページが割かれていて(381 - 400 頁)、大変有益な解釈を示して頂きました。このLichtungという概念は、『存在と時間』でも用いられているとはいえ、中期以降——だいたい『芸術作品の根源』あたりから——中心概念になったと思われそうですが、それはどういう経緯なのでしょう。私は、講演「真理の本質について」(1930年)の思索が注目されると思うのです。(ただし、Lichtungという語は、第8節までの本文中には出てこなくて、後の注記および欄外注に出てきます。)この講演では、通常真理観、すなわち知性と事物との一致、陳述と事物との一致がどのように成り立つかを問うことから議論が始められます。ハイデガーは、この一致にはOffenständigkeitが必要であると考え、OffenheitからLichtungという概念へと彫琢していったように思えます(あくまで仮説)。「現存在の開示性」という真理から、「明るみ」という場としての真理への変化が、この講演あたりに見られないか？そして、「存在の真理」についての考察で講演「真理の本質について」に焦点を当てられなかった理由なども含めて、ご見解を伺いたいと思います。

・「転回」について

また、本書では、ハイデガーの思索の途上で「転回」(255頁, 256頁注)があるとされていますが、それはどのような「転回」と考えられ、本書のテーマである神の問題においてそれがどうかかわるのか(神について大胆に語るという転回があるのか)、ご教示頂ければと思います。

・「超感性的」という点について

つぎに、これはやや些細な点かもしれないが、少し気になるので、時間があれば応答頂きたいと思います。それは次の文章です。

奥深い存在の働きがまず超感性的な領域において存在として顕在化し、その顕在化した存在が超感性的な領域においてその領域へと出で立った人間に対して露わとなるという、こうした双方向の働きの一致がハイデガーの存在の真理の基本構造からは、考えられるように思われるのである。(380頁 傍点引用者)

奥深い存在の働きが顕在化する領域というのは、「超感性的な」性格のものなのでしょうか？ハイデガーでは、カントのような「感性界」「叡智界」という区別はされないと思われ、やや違和感をもってしまうので、この点について解説して頂ければと思います。

3. 第3部の議論から

・存在と神

第3部では、いよいよ「存在」と「神」の関係について上田さんの解釈が提示され、ここが本書の核心部というべきところだと思います。ハイデガーにおける「神」「最後の神」について、上田さんが端的に述べられるところを抜き出してみましょう。

上田さんによれば、「最後の神」とは、「奥深い存在の生き続ける働きの一端が、人間に対して露わとなってくるときの、その人間に対して現前してくる限りでの名称」(426頁)である。また「神」とは「それ自体は自らを秘め隠すものとされている奥深い存在の働きの一端が、人間に対して露わとなってきたときに、その現の場に於ける存在の働きの現前が、「神」として名指される」(447頁)。さらに、「民族の神」は、「奥深い存在の生き続ける働きの、人間に対する顕われの一端」(448頁)である。さらにまた、「最後の神」は、「通りすがりの静けさ」といった仕方で、「顕わになってくるであろうと期待されるもの」(452)であり、「奥深い存在の真理に基づいて顕わとなってくる最後の神」(453)とも語られる。

では、このように語る場合、「顕わになる」「露わになる」という表記との違いはあるのでしょうか？）とは、どういうことなのでしょう？そしてまた、「一端が」という意味合いはどのようなものなのでしょう？

『哲学への寄与』において、存在の思索と神の問題（思索）は確かに連動しております。ハイデガーは、神が「存在と同一視されえない」(GA65, 263)と断りつつ、「存在は最後の神の道の痕跡(Wegspur)として輝く」(GA65, 230)とか、「存在は神々が現れることの振動」(GA65, 239)であるとか、また神は「存在を必要とする」(GA65, 408,438)などと語っています。

存在と神が、『哲学への寄与』の存在の思索において、同時に思索されるわけです。そういったことには、G.フィガールのいうように、「神を喪失したという歴史的経験」²が大きいように思われます。神が不在であるということが、存在が自らを拒むという存在棄却の経験によって（あるいは、その経験とともに）、気づかれ意識され問題化されるということなのでしょう。しかし、ハイデガーは、この不在というものが、そしてその不在に気づくということが、逆に独自の現前を用意するのだと考えているように思われます。その独自の現前とは、《Vorbeigehen》(立ち寄っては過ぎ去る)、《Wink》(遠ざかりつつ近づける)、《Stille》(静けさ)といった、不在の現れ、不在を通した現前ではないでしょうか。そして、このことは、存在の真理における「秘匿」の強調ということと関連しているのではないかと、そう思われるのです。

本書で引用されているように、「存在(Seyn)の真理に基づいて神々と神々の領域が発現する」(GA66, 235f.)と述べられるのですが、なぜ「存在の真理に基づいて」なのでしょう。本書

² Günter Figal, Philosophie als hermeneutische Theologie. Letzte Götter bei Nietzsche und Heidegger, in: Martin-Heidegger-Gesellschaft, 1994, Bd. 3, S. 94. (川原栄峰監訳『ハイデッガーとニーチェ』南窓社、140頁。)

はまさにこの問題を、第2部の重厚な考察と、第3部での『ヒューマニズム書簡』で語られる、（存在の真理→聖なるもの→神性の本質→「神」という語についての）思索の流れの解釈を展開されてきました。とても説得力のあるものだと思います。それで、私としては、この問題を別の角度から、考えてみたいと思います。ハイデガーは『哲学への寄与』で、「最後の神」の到来の準備とともに、「存在の真理に基づいて存在者を再生すること(Wiederbringung)」(GA65, 11)、「存在者を救うこと」(GA65, 100)を課題としています。これは、守蔵(Bergung)としての真理の本質活動（「V 根拠づけ」(e)）についての思索になります。守蔵とは、存在者の内に真理を大切に守り蔵することされ、それによって存在者が一層ありありと存在するようになる(seiender)、とハイデガーは考えております。それは、Gegenstand や Bestand とは異なる存在者の在り方だと言えましょう。上田さんは、本書で「聖なるもの」をヘルダーリン解釈で語られるピュシスとして解釈されていますが、そのピュシスと、『哲学への寄与』で思索されている存在者の再生、すなわち存在者が seiender となる事態と関連させられないでしょうか？

・根源的倫理について

本書の最終の第12章で、上田さんは、『ヒューマニズム書簡』で語られる「根源的倫理」の内実を、ダイモーンとしての神を解釈しつつ、考察されています。この「根源的倫理(学)」というのも、その内容は決して分かりやすいものではなく（ちなみに、『ハイデガー事典』では項目としてはありません）、この議論を最後にもってこられたところは、上田さんならではのハイデガー理解であり、研究史上大変意義深いものになっていると思います。この「根源的倫理」解釈に関して、最後に、順序なく筆の向くままに述べてみたいと思います。

上田さんは一連の論考のなかで、根源的な倫理はどのようなものとして現れうるだろうかという、これまでのハイデガー研究から一層進んだ問いを發し、「イースター」講義（全集53巻）を参照し、そこで語られる「神々の決めた慣習」が、「聖なるもの」としてのピュシスでもあるところの「存在」からの呼びかけ（498頁）とされています。ハイデガーの読みとしてとても説得的であると思いますが、ハイデガー哲学から少し離れてみると、その「根源的な倫理」なるものは、何か「自然法」のようなもの——理論は異なるにしても——と考えてよろしいのでしょうか？

この章の最後の第三節（タイトルは「根源的真理」となっていますが「根源的倫理」でしょうか？）では、根源的倫理を実践した歴史的人物として、ソクラテス、ガンジー、キング牧師が挙げられています。近代のガンジーとキング牧師には共通して「非暴力」ということがあり、またこの語が繰り返し出てきています。ただ、弾圧の抵抗に対してはどこまでも「非暴力」であれというのは——個人的には共感できるのですが——それが根源的倫理における Gesetz や Regel として出てくるのでしょうか？そうすると、ネルソン・マンデラは例には挙げられませんし、インティファダを行ったパレスティナの少年もはずれてしまうことになります・・・しかし、このような疑問を上田さんに向けるのはあまり有意義ではないかもしれません。たしかに、ハイデガーは、上田さんが引用しているように、「人間は[...]存在に帰属する限りにおいてのみ、人間にとって Gesetz と Regel とならざるをえないようなもろもろ

の指示の割り当てが、存在自身から生じる」(GA9, 360f.)と述べています。とはいえ、根源的倫理から、いざ現実の状況における行為の選択を考えようとする、それは、ハイデガー自身の言葉が少ないだけに、非常に難しいことだと思われます。

そこで、ハイデガーのテキストからある程度離れて、存在の真理を人間の原初的境域として思索するという、この「根源的倫理学」を私なりに考えてみたいと思います。上田さんは根源的な倫理（の可能性）と『存在と時間』の「良心の呼び声」とをつなげて解釈されておられます（420-425 頁）が、この解釈に乗じて考えてみたいのです。

「私の中からやってきて…私に襲ってくる」(SZ, 275)呼び声の内容は、何らかの「情報」ではなく、私がここに確実にいて、徹底的に非力である存在であるという事実のことだと考えてみます。その非力さは、死という「現存在の絶対的非力さ」(SZ, 306)において現存在に露呈してくると言われます。「死」の重要な意味は、『哲学への寄与』での思索においても保持されています。少し引用すると、「死へのこの先 - 駆は何のためかと言えば、たんなる《無》が獲得されるためではなく、存在のための開けが完全に、そして究極のものに基づいて開かれるためなのである」(GA65, 283)。「死への先駆」は、「死を現存在のうちに引き込む」(GA65, 285)ことであり、これによって深淵的根拠としての現という場が開かれるとされ、死は、「存在の最高の証し」(GA65, 230)、「最高にして究極の証し」(GA65, 284)となると考えられています。存在の真理を人間の原初的境域として思索する「根源的倫理学」は、死を介して、存在の呼びかけがなされる場においておのれの固有性を得るものであり、「固有・領域(Eigentum)」(GA65, 319f.)を思索することでもあるのかもしれません。

このことは神の問題とも密接に関連していて、自らが「死すべき者」である事実を認めることは、まさに対極に不死なる者の存在を考え、それへと向くという態度を構えることになりえると思われまし、それはまた、おのれ自身の存在および行為の裏面に、「存在の側の働き」(506 頁)があることを実感することかもしれません³。根源的倫理学は、人間がそのような死すべき者の自覚において生き、住まうことそれ自体を指しているというのはどうでしょうか。そしてここから、例えば *Entschlossenheit*、*Verhaltenheit*、*Gelassenheit* などが、何か徳（アレテー）のようなものとして求められると、解する可能性はないでしょうか。

Eisuke YAMAMOTO
Zu Uedas Das Problem des Seins und Gottes bei Heidegger

³ 木村敏の次の自我についての平易な言葉は、宗教的な次元への目配せを与えてくれる。「私が私の実感として、あるいは私自身の生きかたとして「私がある」と感じる場合、この「私」とは「私が生きている」という、なにものにも還元しえない根源的事実のあらわれにほかならない。そしてこの「私が生きている」ということは、私たちの眼に見えない宇宙的生命が、私という一個の生命体に分有されていることにおいて成立している。「自分」ということばは、おそらくこの「分有」の直接的表現なのであろう。」木村敏『自分ということ』ちくま学芸文庫、2008 年、67 頁。